光葉ワーキングクラブメールマガジン

＜2013年11月号＞　　80号 2013.11.01 配信

１０月台風が去って、急に秋が深くなりました。
学園の木々も、少しずつ色づき始めました。文化の秋にふさわしい音楽を鑑賞するにも、積極的に山歩きなど体を動かすにも最高の季節。大いに満喫したいものです。
秋桜祭では全国の支部から特色ある品物が提供されます。同窓会バザー会場へ皆さま、お誘い合わせてお出かけください。

■学園だより

♦11月 3日（日）	指定校制・公募制・光葉同窓会推薦入学試験
♦ 5日（火）	墓前祭
♦ 9日（土）10日（日）	第20回　秋桜祭
♦ 10日（日）	ホームカミングデー

■同窓会だより

♦10月5日（土）中学・高等学校教職員ワーキングネットワーク講演会開催
テーマ：「昭和女子大学附属昭和中学校・昭和高等学校の教育」
講演者：昭和女子大学附属昭和中学校・昭和高等学校校長
大泉章子氏（1972年　日本文学科卒業）
“昭和スタイル”で培うグローバルな総合力を目標に教育をされています。
下記の秋桜祭で展示報告をいたしますので、是非、お出かけください。

♦11月9日（土）10日（日）　第２１回　秋桜祭に参加します。
本年度の秋桜祭のテーマは、“今を生きる　ー私たちの21―”です。
例年通り、同窓会は、大学3号館　玄関ホール、1S01、1S02で参加いたします。
展示のテーマは「創立者人見圓吉先生に連なる人々」
働く女性の支援／光葉ワーキングネットワーク
カウンセリング／心の援助活動グループ
全国支部、同窓生の有志グループ、同窓会本部によるバザー、喫茶等

光葉ワーキングネットワーク「ミニ講演会」
ブラック企業に気をつけよう！

場　所：大学３号館　１階　玄関ホール
日　時：11 月 9 日（土）　11：00~12：00
講　師：　多田　敦子氏　（1983 年国文学科卒業）
特定社会保険労務士

■広げよう光の葉

鷲見光子さん　　1970 年　短期大学部食物学科卒業

「農村の生活改善を通して得たもの」

私は昭和４５年３月に短大食物学科を卒業しました。

在学中は病院等の栄養士を目指し勉強してきましたが、就職先は地方公務員（県職）、農村の生活を改善する仕事を中心に仕事を続けて参りました。経緯ですが、在学中、家政系の短大卒で生活改良普及員（現：普及指導員）という資格が取れることを知り、国家試験に合格していました。その後、埼玉県の採用試験を経て、地域の農業改良普及所に就職しました。

昭和４０年代の農村は、今とは農村環境・健康状況も違い、生活の改善が必要でした。新任当時は、農家の若妻会、園芸婦人部の皆さんに衣食住改善、農業後継者を目指す青年の４Ｈ クラブ活動指導等が主でした。市町村、農業団体、保健所等と連携しながら県の補助事業を使い、目標課題を解決していくものでした。

就職当初、単独で農村に出向き、食生活改善の講習会や実習指導を行う仕事でしたが、現場では何をどうすればよいのか、問題点は何なのか、解決方法は？など新任の私にはこの業務は大変でした。しかし先輩の指導や県・国の研修に参加する内に、仕事を理解し、興味もわき、農業者のために少しでも役立つ仕事をしょうと奮闘しました。

３０代後半からの６年間は、これまでの業務を離れ、農業後継者養成を目的とした県農業大学校に勤務することになりました。学内で生産される農畜産物を使った農産加工実習（大豆で味噌・豆腐、牛乳からバター、豚肉でハムやベーコン）は、興味もあり指導に力が入りました。また、同時期に国際交流事業（埼玉県と中国山西省）が実施されており、毎年数名の研修生が滞在していました。研修生と言っても山西省の試験研究機関の中堅職員で、国際交流にも係わることが出来ました。

その後、旧農業改良普及所が県農政機関等への統合が促進される中、再度農村生活改善を中心とした業務を行うこととなりました。農政・普及・農村整備の３部からなり、県の重点目標に沿った業務で、私は女性農業者の社会・経営参画をめざし、女性リーダーと共にイベントを開催したり、地産地消の野菜直売と特色ある加工品づくり、地域に伝わる郷土料理の伝承等に取り組みました。日々緊張しながら、チームで取り組み、乗り切る困難な課題解決こそ、達成感がありました。人と係わり、人を育てる仕事でしたが、実際は、私のほうが多くの人にお世話になり、逆に知識・技術を得ることが出来たのだと思っています。

私は農業関係の職場で働きましたが、「食農教育」と言われるように「食」と「農」は一体で、幅広い交流の中で働いてくることが出来ました。後輩の皆さんには、与えられた職業の中で誠実に頑張れば、道は開けることと信じて、前向きに取り組んでほしいと思います。チヤンスは逃さずに、しっかりつかんでください。

恩師、故刑部昭子先生には、卒業後に愚痴を聞いていただいたり、たわいもないおしゃべりしたりしたことも、長い間仕事を続ける力だったと思います。

現在は、地元で仕事の仲間や後輩達との交流に料理クラブを作り、旬の地元野菜を使った料理・農産加工を行っています。また、実家の畑を借りて農業を行いつつ、地元知的障害者を対象にした収穫体験を行ったり、元中国研修生達との親交を深めるなど、仕事を通じた生活を続けています。

【End】